

橋口 亘

VI 上月行敬『琉球人往来筋脈之図』に描かれた江戸の瀬戸物店

1. はじめに

宇和島藩士・上月行敬によって描かれた絵巻『琉球人往来筋脈之図』[丹羽 2017] には、江戸芝口一丁目の松坂屋の道路向かいに、瀬戸物店（陶磁器店）が描かれている【図 1】。



【図 1】 絵巻『琉球人往来筋脈之図』に描かれた江戸の瀬戸物店
〈『琉球人往来筋脈之図』より〉

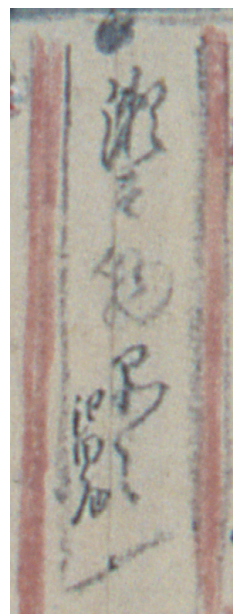
本稿では、上月行敬によって描かれた近世都市「江戸」の瀬戸物店について、他の文献や古写真などの参考資料を交えながら考察を行ってみたい。

2. 「瀬戸物」と「唐津」

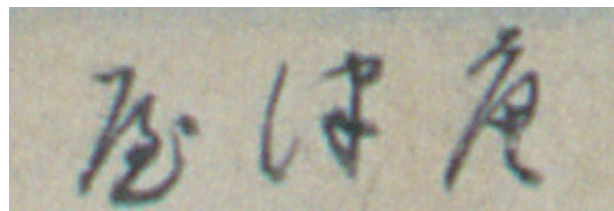
かつて陶磁器類は、東日本で「瀬戸物」、西日本では「唐津」（「唐津物」・「カラツモノ」）などの呼称が広く用いられたとされる[大須賀・平岡・小川・寺澤 1921、徳川 1979]。

当該絵巻に描かれた陶磁器店の看板にみえる「瀬戸物品々」の表記【図 2】からは、東国江戸の空間を丁寧に写し取った作者・上月の几帳面な仕事ぶりがうかがえる。

一方、店の上には、上月によって「唐津屋」という書入れ（説明書き）が付されており【図 3】、西



【図 2】 看板



【図 3】「唐津屋」書入れ
〈図 2・3 ともに『琉球人往来筋脈之図』より〉

国（伊予）宇和島の藩士という作者上月のローカル性が顕在化している箇所といえる。

東国江戸における看板描写のリアリティの一方で、国元伊予で待つ幼い子弟への解説を念頭にして、故郷で耳慣れた「唐津屋」の名称を書入れたのであろうか、当該絵巻成立のモチベーションとなつたとされている、故郷の家族を思う作者・上月の「個人的な熱情」[丹羽 2017] が、ここにも発露していると言ってよいのであろう。

3. 土瓶の吊り下げ陳列

当該絵巻の陶磁器店では、色絵土瓶を店内に吊り下げて販売している様子が描かれている【図 4】。

こうした吊り下げの陳列スタイルは、『宝船桂帆柱』（十遍舎一九作／歌川廣重画／文政 10 年）の瀬戸物屋の図にも描かれており、当該絵巻と同様に店内に土瓶が吊り下げられている【図 5】。

また、WEB 公開されている「長崎大学附属図書館 幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」(<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/jp/>)に収載されている、長崎大学附属図書館所蔵「幕末・明治期日本写真コレクション」の、陶磁器店の古写真（「陶器屋（1）」：「25, PORCELAIN SHOP」〈玉村康三郎撮影〉〈玉村康三郎アルバム〉〈目録番号：2192〉）でも、土瓶が吊り下げられて販売されている【図 6・7】。

商品を吊り下げて販売する理由としては、「商品を目立たせることができる」といった理由や、「吊り下げることで陳列スペースを節約し、限られた店



【図 4】店内に吊り下げられた土瓶類
〈『琉球人往来筋脈之図』より〉



【図 5】『宝船桂帆柱』（十遍舎一九作・歌川廣重画）
（文政 10 年）の瀬戸物屋の図
〈国立国会図書館デジタルコレクションより〉

内空間を効率よく利用できる」といった理由など、様々な理由が考えられるが、殊に土瓶類を吊り下げて販売している理由としては、やはり土瓶の使用方法の問題が大きいのであろう。土瓶は、自在鉤などに吊るしたり、手で弦を持って（手に吊るして）使用するケースが多い製品である。よって、吊り下げた時の製品（弦を含む）の強度や安定性・バランスなどのコンディションは、土瓶の使いやすさに直結



【図6】店内に吊り下げられた土瓶類
「陶器屋 (1)」: 「25, PORCELAIN SHOP」〈玉村康三郎撮影〉
〈玉村康三郎アルバム〉〈目録番号: 2192〉【図7】の部分拡大
〈長崎大学附属図書館蔵〉

する重要なポイントとなってくる。

したがって、土瓶類の吊り下げ陳列は、製品の強度や安定性・バランスなどのコンディションを可視的に担保し、顧客に製品の使用イメージをアピールする極めて合理的な陳列方法といえるのである。

4. 商品陳列方法のバリエーション

こうした「吊り下げ」陳列を含め、前述した「長崎大学附属図書館 幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」に収載されている、長崎大学附属図書館所蔵「幕末・明治期日本写真コレクション」に含まれている陶磁器店の古写真5枚、「陶器屋 (1)」: 「25, PORCELAIN SHOP」〈玉村康三郎撮影〉〈玉村康三郎アルバム〉〈目録番号: 2192〉/「陶器屋 (2)」: 原タイトル無し〈撮影者未詳〉〈目録番号: 2385〉/「陶器屋 (3)」: 「(635)」〈スチルフリード撮影〉〈スチルフリードアルバム (2)〉〈目録番号: 3976〉/「陶器屋 (4)」: 原タイトル無し〈撮影者未詳〉〈玉村アルバム (1)〉〈目録番号: 4129〉/「陶器屋 (5)」: 「PORCELAIN SHOP D47」〈撮影者未詳〉〈鹿島清兵衛アルバム (1)〉〈目録番号: 4305〉を見ると、次の①～⑧のような、陶磁器店での陳列方法が確認できる。



【図7】「陶器屋 (1)」: 「25, PORCELAIN SHOP」
〈玉村康三郎撮影〉〈玉村康三郎アルバム〉〈目録番号: 2192〉
〈長崎大学附属図書館蔵〉



【図 8】「陶器屋 (3)」:「(635)」

〈スチルフリード撮影〉〈スチルフリードアルバム (2)〉〈目録番号: 3976〉

〈長崎大学附属図書館蔵〉

- ①見世棚に置く
- ②床に置く
- ③土間に置く
- ④店先の見世台に置く
- ⑤店先の脇に積み上げて置く (甕・鉢などの大型製品中心)
- ⑥土瓶類を吊り下げる
- ⑦籠に入れる
- ⑧皿を (平置きせずに) 立て掛けて置く

当該絵巻でも、①②④⑤⑥⑧の陳列方法が描かれており、こうした陳列方法が、当時の瀬戸物店において一般的に行われていたことがうかがわれる。

5. なぜ瀬戸物店が描かれたのか

上月の『琉球人往来筋脈之図』には、各々の店舗や通りの人々などまで、煩雑に思えるほどの大量の情報が詰め込まれている。⁽¹⁾ 多くの情報が盛り込まれた当該絵巻は、好奇心が旺盛な国元の幼い子弟の目を引く効果を大いに発揮したであろう。

一方、このように多量の情報が盛り込まれた絵であるものの、その情報は、実際の都会に存在する風景から取捨選択されて描かれている可能性は見逃せない。描かれた店舗の種類についてもそうであろう。当該絵巻には複数種の店舗が描かれているが、瀬戸物店はその一つに選ばれているわけである。

瀬戸物店が描かれた理由としては、茶碗や皿・土



【図9】店先の見世台
〈『琉球人往来筋脈之図』より〉



【図10】店先の見世台
「陶器屋(3)」:「(635)」〈スチルフリード撮影〉〈スチルフリードアルバム(2)〉〈目録番号:3976〉(図8)の部分拡大
〈長崎大学附属図書館蔵〉

瓶といった器物が、幼い子弟にとっても身近な存在で、様々な色・形の陶磁器が陳列して販売されている様子が、視覚的にもわかりやすいものであったからということが考えられる。子弟らが目にしたことのない大都会「江戸」を描き伝えるにあたり、描く店舗を上月が取捨選択するうえで、逆説的ではあるが、子弟らが一見して理解しやすい瀬戸物店の図は外せないものだったのではないだろうか。

こうした子ども向け教材としての工夫という意味では、前述したように、当該絵巻に「唐津屋」という書入れと「瀬戸物品々」の看板の文字が併記されている点も、上月が当該絵巻を用いて、江戸ではやきものが「瀬戸物」と称されるという知識を子弟ら



【図11】店先の脇に積み上げられた甕等
〈『琉球人往来筋脈之図』より〉



【図12】店先の脇に積み上げられた甕等
「陶器屋(3)」:「(635)」〈スチルフリード撮影〉〈スチルフリードアルバム(2)〉〈目録番号:3976〉(図8)の部分拡大
〈長崎大学附属図書館蔵〉

に教授することを目的(前提)としたものであったと考えられる。国元に帰ったのち、当該絵巻を広げながら子弟を前に「江戸では“唐津”(“唐津物”)のことを“瀬戸物”と呼んでいるのだ」と解説する上月の姿が目浮かぶようである。

6. おわりに

本稿では『琉球人往来筋脈之図』に描かれた瀬戸物店について、他の文献や古写真などの参考資料を交えながら考察を行った。当該資料は、近世都市江戸を知る上で貴重な絵画資料であり、今後さらなる内容分析が期待されよう。

【注】

- (1) この『琉球人往来筋脈之図』の前巻に該当する『琉球人行粧 卷二』の巻末には「右行粧跡振ひ并幸橋見附之圖／次之卷ニ記ス」と記されている。仮に、『琉球人往来筋脈之図』に琉球人らの行列が通過した直後の町の様子が描かれているとすれば、その姿は初巻『琉球人行粧 卷一』の冒頭に描かれているような「琉球人往来町筋見物座敷の趣」の光景と類似したものになるはずである。つまり、芝口壺丁目においても、芝口式丁目と同

様に琉球人らの行列を見物しに來た大勢の群衆のための座敷や通行規制ための埦などが設置され、行列通過の直後にはそれらがまだ残っていると考えるのが自然であろう。しかし、『琉球人往来筋脈之図』に描かれている町なみに確認できる、行列通過の名残を直接的に示す大きな痕跡は、新橋の近くに設置された矢来くらいのものである。『琉球人往来筋脈之図』の冒頭に記される「琉球人往来町筋見物座敷の趣ハ初卷二画たれハ略之／此卷ニハ江戸市中店の有様又ハ立商ひ杯の躰を見せんため芝口壺丁目新橋と松坂屋横町と幸橋迄を記す」という上月の言葉は、『琉球人往来筋脈之図』に描かれている芝口壺丁目の姿が、行列通過の直後の姿そのものではないことを示す、まさに「断り書き」である。その一方で、前述のように、『琉球人行粧 卷二』の巻末には「右行粧跡振ひ并幸橋見附之圖／次之卷ニ記ス」と記されているのもまた事実である。「右行粧跡振ひ」と記している以上、上月は行列通過後の光景を描いているはずであるが、まず行列通過の直後を描いた光景として挙げられるのは、新橋の近くに描かれた矢来の前に集まる群衆の様子であろう。また、「後脈」（「跡脈」）（あとにぎはかし／あとにぎはし／あとにぎはひ）という語に注目すると、『大辞林』第三版には「後脈はし」（あとにぎわし）の意として「旅立ちを見送ったり嫁入り行列を出したあと、行く人の平安を祈り、また残った人を慰める気持ちで親類縁者などが催す酒宴。あとにぎわい。あとにぎやかし。」[松村明編 2006]とある。17世紀初頭の『日葡辞書』にも「atoniguiuai」として収録される古語である[中村・岡見・阪倉編 1982]。「後脈」（「跡脈」）に関して、見送りをされる対象は、単に人間が移動するための行列にとどまらず、「神」が移動するための行列である場合もあった。『瀧澤路女日記』嘉永4年6月21日条には、「尚又鯨ヶ橋を仲殿町辺江天王様之跡脈ひ候所見物の為、岩五郎殿・おさち・廉太郎殿同道にて、暮時過罷出ル。所々見物致、伏見氏鮒や江立より、おさち二切鮒を振舞れ、九時頃帰宅。」[柴田・大久保編 2012]とあり、この日「天王」（牛頭天王）が「天王仮屋」（旅先の仮殿）から「御宮」（本来の社）に帰るに際しての祭礼行列（神輿等の行列）が通過し、その「跡脈ひ候所」を見物するため、皆で鯨ヶ橋から中殿町辺りへ暮過ぎに出かけて、所々を見物し、伏見氏が寿司屋へ立ち寄り、おさちが切寿司を振舞われるなどして、夜遅く九つ時頃に帰宅したことがわかる。こうした様子は、『琉球人往来筋脈之図』に描かれた、切寿司の屋台などが出ている芝口壺丁目の通りの賑やかな光景と合致している。このような光景が、上月のいう琉球人行列通過後の「跡振ひ」であると考えられ、上月が用いた「跡振ひ」という言葉も、『路女日記』にみられる「跡脈ひ」などと同様な意味で用いられたと考えられる。当時、祭礼の行列をはじめ人々の注目を集めるような行列の通過後に、「大勢で賑わう」慣習が広くみられ、琉球人の行列の場合もその例に漏れず、こうした慣習を背景に、上月が「跡振ひ」という言葉を用いた可能性が考えられるだろう。

【引用・主要参考文献】（五十音順）

- 大須賀眞藏・平岡利兵衛・小川文齋・寺澤恒一 1921 「佐賀縣の窯業」『大日本窯業協會雑誌』29 集（352 号）大日本窯業協會
徳川宗賢 1979 『日本の方言地図』中公新書 533 中央公論新社
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編 1982 『角川古語大辞典』第一巻 角川書店
長崎大学附属図書館「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」（長崎大学附属図書館が所蔵している「幕末・明治期日本写真コレクション」の画像の公開 WEB サイト）（<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/jp/>）
丹羽謙治 2017 「上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』について」鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図書館本のあいだー『雅俗』16、雅俗の会
松村明編 2006 『大辞林』第三版 三省堂書店

【資料等】

- 『琉球人往来筋脈之図』：上月行敬／〔嘉永4年（1851）〕／鹿児島大学附属図書館蔵
『琉球人行粧』：上月行敬／〔嘉永4年（1851）〕／鹿児島大学附属図書館蔵
『宝船桂帆柱』：十遍舎一九作・歌川廣重画／文政10年（1827）／国立国会図書館蔵（国立国会図書館デジタルコレクション）
長崎大学附属図書館蔵「幕末・明治期日本写真コレクション」のうち「陶器屋（1）」：「25.PORCELAIN SHOP」〈玉村康三郎撮影〉〈玉村康三郎アルバム〉〈目録番号：2192〉／「陶器屋（2）」：原タイトル無し〈撮影者未詳〉〈目録番号：2385〉／「陶器屋（3）」：「(635)」〈スチルフリード撮影〉〈スチルフリードアルバム（2）〉〈目録番号：3976〉／「陶器屋（4）」：原タイトル無し〈撮影者未詳〉〈玉村アルバム（1）〉〈目録番号：4129〉／「陶器屋（5）」：「PORCELAIN SHOP D47」〈撮影者未詳〉〈鹿児島清兵衛アルバム（1）〉〈目録番号：4305〉
『瀧澤路女日記』上巻：柴田光彦・大久保恵子編／中央公論新社／2012 年

【謝辞】

本稿作成にあたっては、「日本近世生活絵引—琉球人行列と江戸編—」編纂共同研究班メンバーの皆様方をはじめ、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、鹿児島大学附属図書館、長崎大学附属図書館等、そのほか多くの方々から御協力・御教示を頂いた。記して感謝の意を示したい。